

中原 4 号墳の鉄鏃について

菊池吉修

1. 鉄でできた“やじり”

古墳に副葬された武器の一つに、弓矢がある。しかし、多くの場合、弓矢の素材は有機質であり、古墳から出土するのは、そこに使われていた金属性の部材のみとなる場合が一般的である。中原古墳群では、「矢」の先端にあたる鏃^{やじり}が出土した（図 1）。鏃の素材には、石、青銅、鉄のほか、骨等の有機質のものもあるが、中原古墳は、鉄製の鏃^{てつぞく}（鉄鏃）が出土した。古墳時代後期の古墳出土品として、鉄鏃は決して珍しいものではない。中長距離攻撃用の武器である弓矢は、当時における一般的な武器の一つであったといえる。

古墳時代における弓矢の研究では、鏃の形状について進展が著しく、時期的変遷や地域的特性が解明されている。また、副葬される本数や組成から、被葬者の社会的立場等がうかがえることも指摘されている。そこで、中原 4 号墳の鉄鏃について、本数と形状等の特徴から被葬者像に迫ることとしたい。なお、鉄鏃の出土位置は、大きく 5 箇所に分かれるが、編年的位置付けから E・F エ

リアの一部と C エリアの出土を除く、大半の鉄鏃が初葬に伴うものと考えられ、中原 4 号墳の鉄鏃の持つ特徴は初葬者の社会的立場等を反映したものといえる。

2. 鉄鏃の形状が示すもの

鉄鏃はその形状から大きく二つに分けられる。一つは、「平根」と呼ばれる幅広のもの、もう一つは「尖根」と呼ばれる細身のものである（図 2）。

中原 4 号墳からは、131 点の鉄鏃が出土し、このうち平根が 43 点、尖根が 53 点である。平根は形状が極めて多様である一方で、尖根は柳葉式、鑿箭式、片刃箭式の 3 種に限られる。多様な平根鏃のうち、特に注目したいのは、一つは方頭式、もう一つは圭頭式である。

鏃身形態には地域的な偏りがあり（図 3）この時期の駿河で一般的にみられる平根の鏃は、三角形式、長三角形式、五角形式であり、いずれも中原 4 号墳でも出土している。一方、方頭式と圭頭式はこの時期、九州～瀬戸内、撫闊三角形式は畿内にそれぞれ分布の中心を持つ形態である。なお、中原 4 号墳の圭頭式の中には、頸部と茎部の境にあたる茎関^{なかにま}が、左右に突出する「棘関^{きよくま}」と呼ばれる形態をなすものがある。また、方頭式は通常、鏃身に

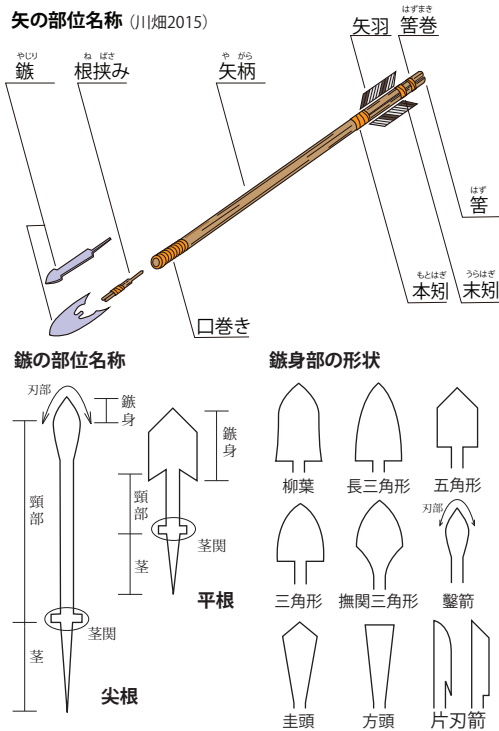


図 1 矢の構造と鏃の形状

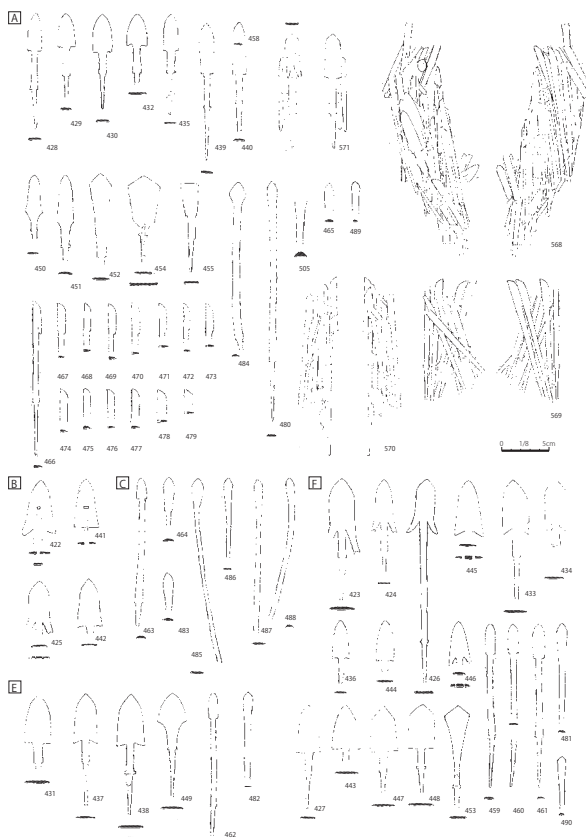


図 2 中原 4 号墳出土鉄鏃

直接「茎」が接続するが、中原4号墳出土のものは「頸部」を介する。このような棘関を持つ圭頭式や頸部を持つ方頭式は、分布が西日本に偏る圭頭式や方頭式の中でも、福岡県と岡山県など限られた地域でのみ出土が確認されている。

3. 出土数の持つ意味

冒頭で触れたとおり、鉄鏃は後期古墳からの出土品としては決して珍しいものではない。しかし、各古墳の出土量には違いがある。東駿河・伊豆の鉄鏃出土古墳のうち、その半数以上は出土量が10点以下である。20点を超えると、鉄鏃多量副葬古墳といわれるが、当地域で20点を超えるものは2割に満たず、中原4号墳の131点というのは突出した出土量である。

なお、埋葬施設の規模と鉄鏃出土量は比例しない。むしろ鉄鏃多量副葬古墳は平均的な規模の古墳であり、中原4号墳もこの傾向に沿ったものである(図4)。鉄鏃多量副葬古墳の被葬者は社会的地位がトップクラスとはいえないものの、鉄鏃の流通や生産に関与したと考えられている。中原4号墳の鉄鏃の形状は多様性に富むものの、尖根は柳葉式と鑿箭式、片刃箭式の3種に集約される。主体を占める片刃箭式は、例外的な2点を除き、鏃身関が角関ないしは極浅い腸袂、茎関が棘関という共通性を持つ。規格性が高い一群を持つことから、鉄鏃生産の場から直接的に鉄鏃を入手したものと考えられる。

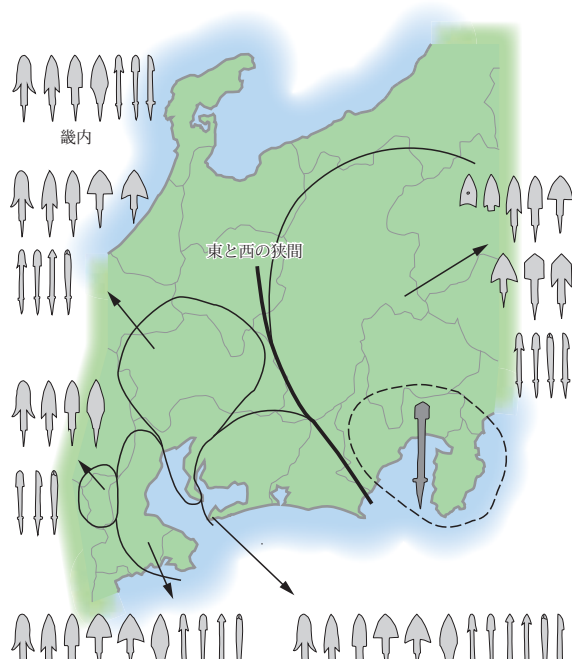


図3 6世紀後半の鉄鏃の地域性(大谷2003)

4. 鉄鏃からうかがえる被葬者像

以上、中原4号墳の鉄鏃は、東駿河の一般的形態に西日本の特定地域に分布する形態を加えた鏃構成という特徴を持ち、地域でも突出した量の鉄鏃の保有と規格性の高い鏃群の存在から、被葬者は鉄鏃の生産・流通の中心に近い立場にいたと考えられる。

さて、圭頭式の特徴で注目した「棘関」は、6世紀後半に出現し、一斉に列島各地に広がる。また、この時期には方頭式のように西日本から分布域を広げるタイプがある。棘関は高句麗でも酷似したものが報告されているが、その出現と拡散、西日本型の鉄鏃形態の拡散の背景には、高句麗と倭との関係が指摘される(水野2007)。

平根の鏃はその形態に象徴性を持つといわれる。鉄鏃生産に近い立場にいたとみられる中原4号墳の被葬者は、半島との関係性を含めた列島規模での鉄鏃生産の動きの中にいたと想定され、平根鏃の多様性に、自らの本拠地と広域的な交流関係を指し示したものと理解される。

【参考文献】

- 川畑 純 2015『武具が語る古代史』古墳時代社会の構造転換 京都大学学術出版会
 水野敏典 2007「古墳時代鉄鏃研究の諸問題」古代武器研究 第8号
 大谷宏治 2003「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第10号(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

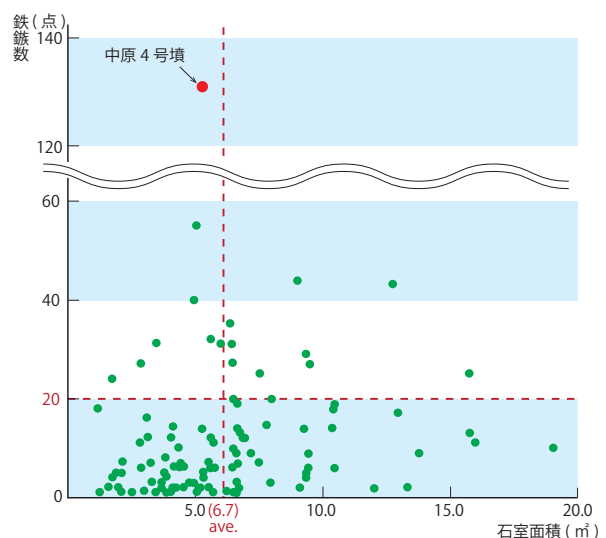


図4 埋葬施設の規模と出土鏃点数